

プロジェクト名：中世ヨーロッパにおける歴史叙述の多層性に関する研究

－『歴史の鏡』の史料論的分析を中心に－

プロジェクト代表者：鈴木道也（教育学部・准教授）

1 本研究の目的

本研究の目的は、近代・前近代を問わず国家的アイデンティティ形成の重要な手段であった歴史叙述に着目し、とくに中世フランスの年代記を対象として、そこに現れる重層的な歴史認識の構造を解明することである。

中世フランス王国における歴史認識の基本的なベクトルは、キリスト教的世界観からナショナルな存在を切り取って特別な存在へと位置づけていく「世界年代記」から「王国年代記」へという歴史観の変化と、「王と諸侯の」フランス史から「フランス国民の」フランス史へと「国民」を拡大していく国家観・国民観の変容という二つの方向性をとる。

したがって本研究では、中世フランス王国で編纂された様々な年代記（世界年代記あるいは王国年代記）を中心的な史料とし、以下二点の解明を主題とする。

1. 多様な歴史認識が交錯する中世社会にあつて、権力体としての国家の成長と変容は、「歴史家」たちの語りをどう変えたのか。
2. 歴史叙述に携わる当時の知的エリートたちは、どのような意識と方法論をもってそれぞれの史書を組み立てていたのか。

2 今年度の研究課題

ここ数年、同様の課題のもとで研究を重ねてきており、その成果の上に立って今年度は、王国年代記に先行して制作され、同時代のフランス王国内外に一定の定着をみていた特定の世界年代記に現れる基本的な世界認識・歴史観をあらためて確認したい。

3 具体的な分析作業

天地創造に始まり皇帝治世を章編成の基準とする世界年代記のジャンルに属すヴァンサン・ド・ボーヴェ『歴史の鑑』[1244年編纂]は、フランス初の王国年代記『王の物語』[1274年編纂]がその成立当初

不人気であったのとは好対照に、多くの写本が作成されている。この『歴史の鑑』の受容過程を見ることで、当該期ヨーロッパの知的エリート層に共有されていた基本的なフランス王権観を明らかにすることが可能になると思われる。

4 研究の成果

①『歴史の鑑』の成立

「フランス史のバイブル」とも称される『王の物語』は、年代記の完成からほぼ1世紀間、つまり13世紀後半から十四世紀半ばまで聖俗有力者の関心はそれほど高くなかった。しかし成立当初からしばらくの間不人気であった『王の物語』を尻目に、同じルイ九世の援助を受けて制作された後、直ちに好評を博したのが、ヴァンサン・ド・ボーヴェ (Vincent de Beauvais) [1190-1264]が編纂した百科全書的著作『知識大鑑』の一部をなすラテン語史書『歴史の鑑』(Speculum historiale)である。この史書は、天地創造に始まり皇帝ルードヴィヒ2世治世に至るキリスト教世界の歴史を描いており、部分的な写本も含めれば全体で220点ほどの写本が知られている。ロワイヨモン修道院での彼とルイ9世との緊密な交流は多くの国王伝記が伝えるところであり、この作品自体、ルイ9世を献呈者としている。『王の物語』と異なり、『歴史の鑑』は王の存命中に完成したため、その内容を国王が直接目にするのが可能であった。またフィリップ4世(位1285-1314)治世においては、俗語(フランス語)版の制作がジャン・ド・ヴィニー (Jean de Vigny)の手で開始されており、1330年頃フィリップ6世(位1328-1350)の最初の妃ジャンヌ・ド・ブルゴーニュに献呈されている。この仏語版もラテン語版とならび数多くの写本を生み出す原本となっている。

②『歴史の鑑』の基本構成

『歴史の鑑』の基本構成は、フランス王権に配

慮した箇所が部分的に確認されるとはいえ、旧約の創世記に倣った記述に始まり最後の審判で終わること、その間は皇帝治世を編年の基準としている点において、基本的には、キリスト教的世界観にもとづいてキリスト教徒共同体のアイデンティティを表象する普遍年代記の形式に忠実であった。全体構成上、『王の物語』との相違は明瞭である。したがってそこに新たな歴史観の成立を見出すことは難しい。編者であるヴァンサンは冷静な教会歴史家であり、フランス王国観を喧伝するプロパガンディストではなかったように思われる。『王の物語』に示されたカペー的歴史観は、「先進的」であり、当時の王侯や聖職者たちには容易に受け入れられるものではなかったのである。とはいえ、こうした結論を早々に下してしまうことには慎重であるべきであろう。というのも、『歴史の鑑』には大きく分けて二つの版が存在しており、両者の間に存在する相違は、まさにカペー朝の正統性に関するものだからである。従って次の分析作業として、この二つの版における書き換えの問題を取り上げた。

③ 『歴史の鑑』の一般性について

13世紀後半に成立する王国年代記『王の物語』との比較を軸に、『歴史の鑑』の基本的性格について、二つの版の違いを中心に確認した。『歴史の鑑』は間違いなく普遍年代記のジャンルに属するものであり、フランク（フランス）王もその王国の歴史もキリスト教的世界を構成する一有力諸侯<princeps>に位置づけられていた。

しかし数度に渡る改訂作業のなかで最も意識されたのは、カペー朝の王朝的正統性を、皇帝シャルルマーニュとの系譜関係から証すことであった。その正否はともかく、普遍史の文脈に織り込まれたカペー的王権観は、まさにそのことによって、13世紀後半から14世紀前半というカペー朝末からヴァロワ朝成立にかけての混乱期にあつて、『王の物語』よりも多くの読者を得ていたと思われる。国家史の叙述は始まったばかりで、いまだ完結性に乏しく、普遍的世界観と王朝記を組み合わせたものに過ぎなかった。そしておそらく『歴史の鑑』の改訂作業を間近

で見ていたルイ9世にとっても、それはごく自然なことであつた。

ナショナルな意識を構成する重要な部分としての「公論<Opinion Public>」に関して、近年の研究はサン＝ドニの修道士ミシェル＝パントワンの著作をひとつの例として、従来想定されていたよりもかなり早い14世紀末頃にその「発見」を想定している。『王の物語』の編纂にあつたプリマも、『歴史の鑑』をまとめたヴァンサンも、ともに編纂者として卓越した才能を発揮していることは疑いない。ほぼ同時代を生きた両者の間に交流があつたかどうかは確認できないが、彼らのような歴史家、そして国家の意思が国家の領域性とそこに住む国民へと向かうには、14世紀はまだ少し時期が早かつたように思われる。

④ 王国史叙述における「客観性」について

最近フランスで出版された二つの論集（『詩的眞実と政治的眞実』と『年代記の詩学』）が、中世の歴史叙述を政治的な詩作と捉える視点に立っていることを手がかりに、『歴史の鑑』分析において、歴史学における文献学的研究の成果と近年の文学理論を融合させるような視点を得ることをめざした。その結果、初期「国家史」としての性格を有する『歴史の鑑』は、歴史を語るその叙述スタイルにおいて、先行する「教会史」に典型的なキリスト教的（あるいはユダヤ教的）歴史叙述の伝統を継承する部分も多いことが確認された。また他方で、論理実証主義のもとで一定の様式を生み出してきた近代以降の歴史叙述をすでに先取りする客観的歴史記述への試みもそこには認められた。このことは、歴史叙述全般を対象に「歴史は何をどう記してきたのか」、あるいは「歴史は何を記すべきか/記すべきでないのか」という問いを投げかける、近年のいわゆる「物語り論」の構想に対しても、中世王国年代記の分析作業が一定の意味を持ちうることを示している。現代の歴史家も中世の歴史家も、その立場や時代の違いを超えて、「詩的眞実」と「歴史的事実」をいかに調和させて読者に「政治的眞実」を提示するか、という難題を抱えており、実際その叙述スタイルには共通するところも多いように思われる。